

英彦山事件

この年、文久三年（一八六三）五、六月浪士や長州藩士が英彦山に入り込み、英彦山神社の僧と組んで決起し、攘夷を決行しない小倉藩を領内からつき崩して小倉城を占拠しようとしていた。また、英彦山神社は、元来勅願所ということもあつて尊王の素地は十分あつた。八月十八日の政変で、事態は一変した。尊攘派の者に対する探索が厳しくなると、英彦山は彼らの避難場となり多くの者たちが集まつてきた。そこで、十一月小倉藩は兵を送り込んで、座主から攘夷決起を促す計画に参画した僧たち・浪士たちを捕らえて処罰した。

第二節 幕長戦争

一 第一次長州征討

禁門の変

京都での尊攘派の勢力挽回を図ろうとして、長州藩は京都を守る会津・薩摩藩を中心とする公武合体派の守備兵たちと武力衝突した。元治元年（一八六四）七月のことである。これを禁門の変（蛤御門の変）という。前年の八月十八日の政変から京都は、公武合体派が勢力を盛り返していた。一方、長州藩内は、藩論（藩の政策）が二つに分かれて紛糾していた。ひそかに勢力挽回を図ろうと、京都にい

た尊攘派の志士たちが、六月に、新撰組に襲われるという池田屋騒動がおきた。この事件を契機に長州藩は出兵を決意し、世子毛利定広と福原越後・国司信濃・益田右衛門介ら三家老が藩兵などを率いて上京した。七月十九日から会津・桑名・薩摩・彦根藩兵からなる京都守備兵と戦端が開かれ、戦闘は一日で終わったが、京都市中は火災に包まれて多くの罹災者が出た。このとき、真木和泉（久留米水天宮の神官）はみずから組織した忠勇隊を率いて戦った。しかし、戦いに敗れて、七月二十一日天王山頂（現京都府乙訓郡大山崎町）にて諸藩出身の浪士とともに命を絶った。

この変の結果、七月二十三日には長州藩追討の命令が出され、長州征討（第一次）を迎えることになるのである。

四国連合艦隊

元治元年（一八六四）七月、イギリス・アメ

下関砲撃事件

リカ・フランス・オランダからなる四国連合

艦隊は、攘夷決行した長州藩の下関を攻撃して、関門海峡の通航の自由を確保しようとした（『維新史』第四卷）。この攻撃の原因はもちろん長州藩の攘夷行動にあつたが、他の理由として幕府の横浜鎖港の政策を止めさせるといふねらいもあつたのである。このときロンドン留学から帰国して攻撃中止工作に奔走していた伊藤博文と井上馨の努力もむなしく、攻撃は八月五日に開始された。このとき、長州藩の前田孫右衛門と井上が交渉に臨んだが間に合わず、前田は「ああ国事を誤れり」と涙を流

表5—36 四国連合艦隊の内訳

	軍艦(隻)	大砲(門)	兵員(人)
イギリス	9	164	2,850
フランス	3	64	1,155
オランダ	4	56	951
アメリカ	1	4	58
計	17	288	5,014

(石井寛治『体系日本の歴史』12「開国と維新」小学館出版より転載)

したといわれている(田中彰『日本歴史』一五 集英社刊 一四〇頁)。

四国連合艦隊は七月末に横浜を出航し、八月二日豊後水道の姫島に集結した。艦隊は一七隻の軍艦(アメリカだけは仮装艦)からなっていた。連合艦隊の戦力は表5—36のとおりで、強力なものであった。戦闘は五日午後四時十分から開始されたが、一時間後に主要な

長州藩の砲台は壊滅した。その後、陸上戦が行われ、長州藩は完全に敗れた。そして、高杉晋作や伊藤博文の活躍で講和条約が結ばれた。こうして、前年七月の薩英戦争と同じく攘夷の敗北が明らかになったのである。

長州征討 (第一次) 長州征討の話題は八月十八日の政変直後に出たが、実現不可能であった。現実の課題になった

のは、元治元年(一八六四)正月の参与会議においてであったが、会議の解散によって消滅した。禁門の変後の七月二十三日、朝廷は長州征討令を下した。この命を受けた幕府は、直ちに征討の準備にかかり、まず西国の二藩に対して出兵を命じた。また、京都周辺と大阪湾岸及び大坂の警備を近郊の諸藩を

中心に命じた。更に総督には前尾張藩主徳川慶勝(最初は紀伊藩主徳川茂承)、副将には越前藩主松平茂昭を任命した。八月には諸大名の部署を決定し、芸州方面(広島県側)、石州方面(島根県側)、四国から徳山方面(愛媛県側)、下関方面(北九州市側)、海路から萩に上陸の五方面からの攻略を決め、それぞれ一番手・二番手の配備を発表した。九州諸藩に限ってみると、下関方面には熊本・小倉・中津・千束(小倉支藩)・安志(備前国の小倉藩の親族)の五藩を一番手、筑前藩・佐賀藩を二番手、唐津藩を二番手応援にした。

海路萩からの攻略軍の一番手は薩摩藩、その応援を島原藩とし、久留米と柳川両藩は二番手に決めた(『維新史』第四巻)。

小倉藩の戦 闘 準 備 各藩が小倉に集結することになったため、小倉

月に入ると領内から六五人の郷筒を差し出すように指示し、小倉城下では夜間通行の場合、鑑札を所持させるようにした。また、各藩の駐兵に備えて、白米搗き込みが急がれ、各郡から搗き夫と諸品の徴発がはじまった。その状況の一端は次のとおりである(表5—37)。

また、長州征討軍の小倉集結は以下のとおりである。

- 八月 六日 唐津藩から先陣三〇〇人ほど小倉着
- 八月 八日 福岡藩、若松辺一帯に出兵
- 八月二一日 熊本藩から先陣のもの小倉に着、二十五日までに二七〇

表5—37 軍用物資の徴発

月日	品 目	数量(郡中)
8月4日	松大束	7000束
8日	薪	1万束
9日	草鞋 馬沓	10万束 2000束
16日	篝薪	2万束
26日	人足	1万人
9月1日	人足(薪1万5000束 切り出し夫)	1000人
7日	大束薪	5万束
8日	軍用草鞋(被差別部 落に賦課)	10万束
9月初旬	1丈杭 8丈杭 縄 藁	5000本 5000本 2万束 3万把

〔『豊前市史』上巻 1021~1022p〕

○人余となる

九月 八日 老中稲葉美濃守正邦、小倉着、陣小屋など視察

九月一二日 中津藩出陣、京都郡苅田に在陣から小倉郊外黒原に在陣

(薩摩藩の加勢を含み四〇〇〇人)

唐津藩出陣、小倉に在陣

小城藩出陣、企救郡湯川に在陣(見合わせとなる)

一〇月二日 播州安志藩、幸松丸以下出陣し宇島着、翌日小倉入り

一〇月二四日 副総督松平越前守茂昭の先陣四〇〇〇人宇島着、明日小倉入り

倉入り

一一月 五日 幕府軍目付宇島着船、万屋小今井助九郎方に止宿、翌日

小倉に出入

松平越前守の大砲隊(五〇〇人余)と旗本勢(一三〇〇人余)が宇島に上陸、宇島、八屋、沓川に止宿、小倉へ

向け進発

向

一二月二日 中津藩山崎直衛以下約六〇〇〇人(実際は二五〇人ぐらい)

が出兵

〔『豊前市史』上巻一〇二一~一〇二二頁より引用〕

なお、『中村平左衛門日記』(北九州市立歴史博物館編 八八三頁)によると、主な出兵人数は、越前藩は五〇〇〇人ほど、肥後藩は八五〇〇人、薩摩藩は二〇〇〇人ほど(別動隊として二五〇〇人ほどが筑前領菅屋に)、中津藩は七〇〇〇人ほど、唐津藩は一八〇〇人ほど、安志藩は五〇〇〇人ほどとなっている。全体からみると、三五藩一五万人の大軍をもって長州藩を包囲した。

しかし、長州軍とは最後までまったく戦火を交えなかった。そして、十二月二十七日には総督の徳川慶勝が撤兵令を下し、それぞれは藩地へ引き揚げたのである。このように、長州征討(第一次)は戦闘がなかった戦いだっただけでなく、藩内では俗論派とよばれる保守派が藩政を掌握したためである。また、この俗論派が主導する藩当局は、禁門の変の直接の指揮者だった益田右衛門介・福原越後・国司信濃の三家老

に自刃を命じて、恭順の姿勢を示したからである。総督の徳川慶勝はこれを長州藩の伏罪とみなし、諸藩に撤兵を命じた。これがのちに征討の不徹底とのそしりをうけるようになったのである。

二 第二次長州征討

第二次征長戦の開始

慶応元年（一八六五）四月、幕府は征長先鋒総督に前尾張藩主徳川茂徳もとのりを任命し（翌月、紀州藩主徳川茂承に交代）、さらには將軍が征長のために進発することを布告した。「長州藩において、容易ならざる企てがある」という曖昧な理由による再征であった。將軍家茂は、予定どおり、五月十六日江戸城を出発し、東海道を西上して閏五月、上洛参内した。

この当時、第二次長州征討に関する諸藩の態度は表5—38のとおりである。この表をみる限りでは、雄藩といわれる諸藩はこの征討にほとんど賛同を示していなかったことが分かる。

その一方で、長州藩では、高杉晋作ら新しい勢力によって抗戦の姿勢をとっていた。

九月、將軍家茂は再上洛した。そして、参内して征長の勅許を得ることができた。ところが、幕府主導を好ま

表5—38 慶応元年4月～閏5月における第2次長州征討に関する諸藩の意見

藩主・旧藩主（藩名）	藩の意見
徳川慶勝（尾張藩主）	不可、長州藩内は同藩主以下に鎮静方を申し渡す再征の名義を明示すべし。
松平茂昭（福井藩主）	長州処分 ^の 諸藩主の諮問、評議を尽くすべき。 徳川家の興廃にも関係する重大事。
松平慶永（前福井藩主）	天下の乱階（乱の起こるきっかけ）になる。 朝意の本意を伺う。
池田茂政（備前藩主）	1次征長では寛典に処する。 寛典説を捨てず、再征の非を主張する所存。
池田慶徳（因州藩主）	再征の不可、決行はなされようが静観する。
浅野茂長（安芸藩主）	藩地を離れがたい事情あり、（池田慶徳の催促に対し）上坂は出来ない。 家老をして長州処分について斡旋中。
藤堂高猷（津藩主）	藩内の鎮静を凶らしめるべし。
脇坂安斐（龍野藩主）	一次長征で伏罪中、以後至当の処分待ち。再征は驚愕。徳川家の浮沈に関する切迫の時勢。
徳川茂承（紀伊藩主）	征討の名義不分明。
蜂須賀斉裕（阿波藩主）	慎重に考慮し、適宜の処置を行うべし。
細川慶順（肥後藩主）	鎌田家老は専断して征長軍の先鋒を望んだが、藩内の議論沸騰。藩主は再征の名義不分明。先鋒の任は辞退する。
黒田長博（筑前藩主）	再征不可、公に建議しなかった。
井伊直憲（彦根藩主）	征長旗本先鋒を請う。
井伊直安（興板藩主）	従軍する。
桜井忠興（尼ヶ崎藩主）	従軍する。
松平武聡（浜田藩主）	二念なく征討を行うべし。

（維新史料編纂事務局『維新史』第4巻より作成）